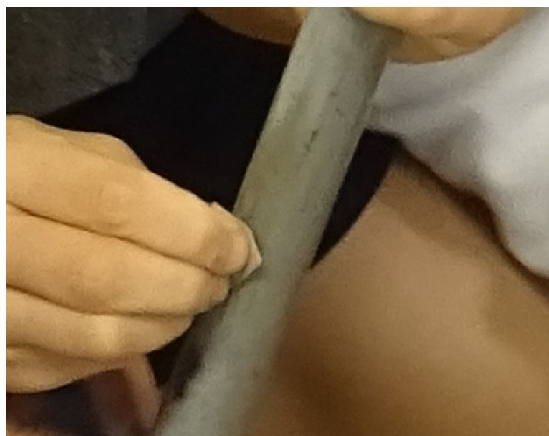


「椅子の脚を削る」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋



3年生の子どもたちが、古い椅子をひっくり返して、そのまわりに集まってガタガタやっている。一体何をしているのだろうか？



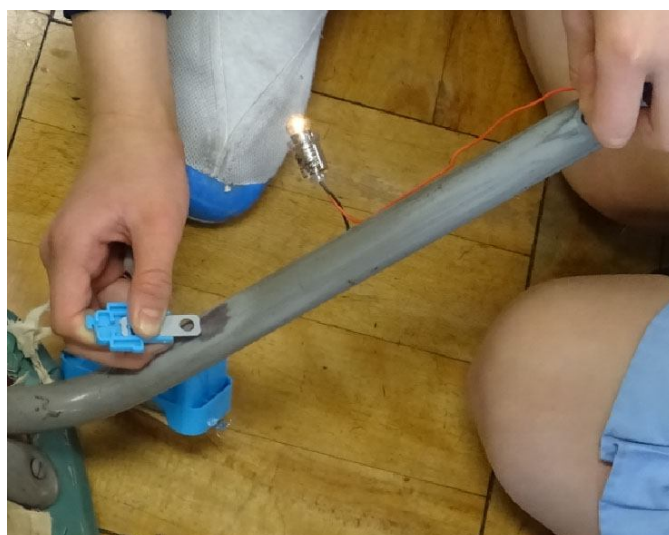
これは、椅子の脚を紙やすりで削っているのだ。「電気を通すもの・通さないもの」を調べる活動で、多くの子どもは、自分たちの使っている椅子の脚を調べる。「金属だから電気を通すはずだ」という大方の予想に反して、豆電球はつかない。「何か電気を通さないものが塗ってあるんだよ」ということで意見が一致する。すると「先生、椅子の脚を紙やすりで削っていいですか？」となる。子どもたちは、色鉛筆のケースでも同じことを経験していて、「削れば電気を通す」と予想したわけだ。

現役の子童用椅子の脚を削らせるわけにはいかないので、私は理科準備室から、廃棄予定の椅子を持ってきた。20世紀、いや昭和の遺物で、今や骨董的

価値のある古い椅子だ。「これならどうぞ自由に」と渡したら、この写真のようになったわけだ。



錆び止めの塗装面を削ると、錆びていない鉄の本体が現れる。子どもたちは、塗装面と金属面の光沢や完食の違いを確かめていた。



削った部分2か所に電極を接触させると、豆電球がつく。椅子の脚が回路の一部になった一瞬である。このあとこの古い椅子は、塗装面があちこち削られて、哀れな姿になってしまった。しかし、椅子にしても廃棄前に、一仕事できてよかっただろう。

【子どものノートから】(*は筆者注)

「いすの足(*脚)は、ぜったいに電気を通すと思ってたのに、だめでした。先生が理科ジュンビシツ(*準備室)から持ってきてくれたいすの足をけずって、はなれたところにたんし(*端子)をくっつけたら、まめ電球がつかしました！」

「いすの足には、何かペンキみたいのがぬってあって、電気の通り道のじゃまをしていた。でもそのじゃまなペンキがきえて、いすの鉄が回路になったので、豆電球がついた。色えんぴつの箱と同じ」